
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第27号 2020年3月

1930年代上海のモダンガールのライフスタイル

— 女優の日記を基にして —

1930s Shanghai Modern Girl's Lifestyle

— Based on the Actress's Diary —

謝 黎 | XIE li

1930年代上海のモダンガールのライフスタイル

— 女優の日記を基にして —

1930s Shanghai Modern Girl's Lifestyle

— Based on the Actress's Diary —

謝黎 | XIE li

This paper considers what a modern girl's lifestyle was like, by looking at her “Diary” which appeared in a Shanghai magazine in the 1930s.

Shanghai in the 1930s created a modern urban space by adding Western ideas and thoughts to the Chinese tradition through the concessions.

It was modern girls such as movie actresses and professional women who made Chinese people realize what outside world looked like and how people there lead their lives.

In the diary, it would be possible to read how one girl lived as an actress in Shanghai of its 1930s, what kind of social relations she had with people around her, what kind of perceptions she had about her own marriage and fortunes brought to her through her career, and what kind of attitudes she developed towards social and political situations in China at that time.

Being a professional actress, she grieves also the gap between Chinese and Hollywood actresses. This paper focuses on the voice of an actress in Shanghai in the 1930s. What the modern girl saw as “femininity”, and the expression of “femininity”, and considers what role cheongsam played in her lifetime.

Keywords:

女優、ライフスタイル、チャイナドレス、女らしさ
Actress, Lifestyle, Cheongsam, Femininity

1. はじめに

本論は1930年代の上海女優である雪映が『電影時報』に連載した「女明星日記」(女優日記)を資料に、当時のモダンガールのライフスタイルを明らかにするものである。

1930年代の上海は、中国の伝統文化に西洋の入り口だった租界を通した西洋文化が加わって、近代的な都市空間が作り上げられていた。それを具現化したのが映画女優や職業女性などのモダンガールたちだった。

中でも当時人気を誇った女優の雪映は、『電影時報』に日記を掲載し、仕事、ファッション、男性観や結婚観、社会情勢への見解、そして自らの金銭感覚を忌憚なく述べている。彼女の日記からは、スクリーンからはうかがい知れない、当時の上海の先端を生きるモダンガールの姿を見ることができる。

日記からは、①女優の仕事、②身体表現とファッション、③メディアへの対応、④男の間での応酬・女優の恋愛、⑤金銭感覚、⑥同性愛と結婚観、⑦社会情勢や国家運命に関心を持つことの7つの主題を通して、スクリーン内外での雪映の姿を知ることができる。雪映は女優としてのプライドを見せながら、ハリウッド女優との格差を嘆き、しぶとく生きている。

女優日記はある意味で、「女らしさをどう見せるか」というプロの腕を持つ女性が書いたものと言える。女優たちは何を「女らしさ」と見ていたのか。何を着て自分たちの魅力を表現していたのか。また「女らしさ」を表す時にチャイナドレス(中国語読み:旗袍<チーパオ>)はどのような役割を果たしていたのか。女優のまわりにいる男たちとどのように付き合っていたのか。一般の人々との間に金銭的感覚やライフ

スタイルに対するギャップは何なのか。

本論は、1930年代上海の一女優自身の声を通して、当時の生き方、またその生き方に彼女を彩ったチャイナドレス（旗袍）が、どのような役割を果たしていたのかを考察する。

2. 日記という記載形式

ある時代の世相を調べる時に、新聞や雑誌といったメディアを取り上げることが多い。私も多くの場合そうしているが、本論では、「女優日記」という私的な媒体が表れた女性が一人称として書いたモダンガール本人の「声」に焦点を当てたい。そうすることで、政府の資料や档案（とうあん）といった公のものに見られない「沈黙させられた女性」という存在に明かりを当てることにもなる。

伝統的な中国社会では、女性に求められるのは「女子無才便是徳」であった。すなわち、女性は才能や知識がなくても、伝統的な道徳を守ればよいという教育観である。女性に必要なのは、結婚生活や家を継ぐ際に必要な「術」を継承することである。こうした「術」には、読み書きの能力や女性自身が一人の人間として何かを主張することが許されない社会であったことが読み取れる。

そういう意味で、長い間の中国社会では、女性が「沈黙させられた集団」であって、自ら「声」を出すことがなかった。そこで、雪映が女性目線で書いた日記からは、その「沈黙」を破り、1930年代に生きてきた女性の証や、感情世界における揺れ動きといったことを垣間見ることができる。

この日記が書かれた時期は、1934年4月7日から8月21日までの4か月半という短い期間だった。著者の雪映は女学生だったころ故郷で結婚したが、その後離婚し、故郷を離れて上海で女優の仕事をするようになった。雪映は本名ではなくペンネームだった。

最初、「常恵芳」というペンネームで不定期に新聞に寄稿していたが、彼女の文才に感銘を受け、記者に連載を書くように勧められた。そこで、『電影時報』に連載した日記が『女明星日記』として1934年に上海良友図書印刷公司によって出版された。

日記に出てきた言葉づかいや語彙からは、雪映はある程度の教育を受けたモダンガールであることが見て取れる。たとえば、女学生に人気のあるチョコレート、ダンスホールで

欠かせないワルツ、モダンガールの必須品であるマニキュア、そのほかに、カメラやハリウッド女優の名前などの外来語には、漢字を当てて書いていた。全体的に中国語がメインではあるけれど、時には英語単語、たとえば、charming（チャーミング）、exotic（エキゾチック）、queen（クイン）、love scene（ラブ・シーン）、happy（ハッピー）、ending（エンディング）といった単語を文中に入れたりして、西洋文化を受け入れたモダンガールの姿を見せる。

女優という職業関係上の問題で、人物名の呼び方にも工夫していたことが分かる。男性には、莫君、張君、葦君、あだ名（長脚許：「足の長い許さん」、金魚胡：「金魚の目をしている胡さん」、記者老藤：「記者藤さん」）のような呼び方を使って、フルネームでは呼んでいない。

一方、映画監督はフルネームで記載していた。また、有名女優たちにも芸名や本名をフルネームで書いた。しかし、親しい女優の友人やかつての同級生に対しては、姉妹呼び（恵妹、蛭妹、黎灼妹、明輝姉）をしている。こうした人名の呼び方から、著者の日常生活の友人関係が分かる。

また、日記に記載されている場所は主に上海だが、撮影の関係で広東や杭州、蘇州などの生活、仕事、恋愛なども書かれている。日記の空間は一つの場所に限定せず、著者の生活とともに移動していることが分かる。

その日記は、1930年代上海の職業女性の生活が書かれている貴重な資料である。恋愛感情も生き生きとして描かれていて、生活画面などとともに、歴史的絵巻として見ることもできる。

雪映は上海の映画女優であり、自我意識の強いモダンガールである。当時、一部の女性作家や知識人以外、日記を書く女性は少なかった。この4か月半の内容は一番長いものであって、仕事ぶりや恋愛史の数々、また収入の大半を百貨店に注ぎ込んだ快感と後悔の意を併せた感情など、赤裸々にモダンガールの日常生活を描いている。

私的な空間としての日記は、彼女の感情を受け止めてくれる場所でもあったのだ。残念なのは、恋愛に失敗し、心身とも深刻な傷を負ったことから、最後に日記を止めてしまったことである。

もちろん、日記に書かれたことは、すべて事実とは限らない。しかし、少なくとも、1930年代上海の一人の女優の心の軌跡、職場での賢い対応、私生活にある喜怒哀楽、恋愛と結婚に対する考え、ファッションセンス、「女」の見せ方、女優のプライドと実際の環境に対する失望などは、読者の好

奇心を掻き立て、「女優を知りたい」という大衆の願望を満たしつつもいろんな疑問も残す、という絶妙なバランスをとっている。私も雪映の日記を一気に読みきって、彼女の人生に惹き込まれてしまった。

日記というかたちをとった文章では、公の公文書と違って、一人称としての著者が女性自身の目線で書いた生活痕跡が重要である。

「女性解放」や「男女平等」が叫ばれた民国期(1912—1949)は、纏足廃止や中国女性身体の「発見」、女性の社会進出やモダンガールの出現など、清朝期と比べて大きく変わったことは明確であった。しかし、それでも、女性が「沈黙させられた集団」だということには変わりがなかったのだ。

この時期、女性にまつわる多くの記述は、当時の男性が好む女性像が流布し固定化していた。それよりも何よりも、女性が自ら筆を持ち、自分の想いを発表する機会は少なかった。それだけに、雪映が定期的執筆した女優日記には、当時の女性の本音が、自らの職業と、それを支える女性としての生き方が描かれており、これを分析することで、当時の女性の「女として」の生き方、そして彼女たちを着飾ったチャイナドレス(旗袍)の意味を探ることができるのである。

3. 女優のライフスタイル

日記からは上のような1930年代の職業女性としての女優の日常生活や仕事ぶりを見ることができる。

雪映は莫君と張君の二人の男との間に、最初曖昧だった友人関係を恋人関係へと変えた。その後、葦君が入ってきて、心が動いて、三角関係になる。その後ふられて大病したが、それでも、雪映は葦君を責めなかった、逆にふられたことを「運命」として片づけた。さらに、自分の度胸がいかに広いということを葦君に見せつけるため、彼の結婚相手であるアメリカ人女性の写真を自分に送ってほしいまでと頼んでいる。

仕事については、その辛さや好き勝手に映画を選ぶことができないことや、必要に応じてヌードシーンの撮影もあることなどが書かれている。

また、女優の間にある嫉妬やヒロインをめぐる競争、いろんなセクハラ、給料は一般の女性と比べると少し多いが

社会的地位は高くないなど、映画界の実情を知ることができる。

他方では、スクリーンの外での雪映は、日常生活の中で、モダンな着こなしで、身体ラインをどう美しく見せることが知っている。モダンな商品(香水、カバン、外国布地など)を百貨店で購入し、ダンスホールで踊り、レストランで食事、男とドライブするといったことは日常茶判事だった。

雪映はスクリーンの中と外、いずれでも注目されている。彼女は映画ヒロインを手に入れて、役作りに力を注ぐ一方で、私生活では男たちとのロマンスもたびたび「上演」している。大衆の注目の的である雪映は、映画のファンが多く、女学生から憧れの存在であった。しかし、それでも彼女は結婚か仕事かという選択に悩み続けていた。

女優日記は当時の世相もある程度反映している。次は、日記の記載から7つ主題別項目に分けて述べる。

- 主題1：女優の仕事
- 主題2：身体表現とファッション
- 主題3：メディアへの対応
- 主題4：女優の恋愛と男性関係
- 主題5：金銭感覚
- 主題6：同性愛と結婚観
- 主題7：社会情勢や国家運命に関心を持つこと

主題1：女優の仕事

女優としての雪映は普通の女性より報酬を多くもらっているが、女優という仕事の特徴から、ハードな撮影スケジュールや、職場で受けたセクハラ、「芸術」と称するヌードシーン撮影時に迷う気持ち、映画のスポンサーに犯されそうになった時に臨機応変な対応など、雪映は女優という職業を通して、さまざまな場面を経験し、その心境を日記に書きとめた。

雪映は多くのファンに憧れる存在としての自覚をもち、プライドを見せる一方で、男社会からの圧力やハリウッド女優と比較した中国女優の無力さもしばしば眩いていた。また、仕事で嫌なことがあっても、そばにいる男たちと一緒にドライブをし、レストランで食事をしてからダンスホールで踊るといった快樂を享受する場面も多々あった。

スクリーンの中で受けた嫌がらせやセクハラを実生活の

中で柔軟に対応した記述からは、雪映のしぶとい生き方や強い心の持ち主といった側面も見えるのである。

【事例1】:共演者の俳優許さんからセクハラを受けたこと。

「ある日、蘇州の名勝地(虎丘)で撮影した時に2千人ぐらいの観衆が集まってきて、現場は混雑で大変だった。夜、宿泊の蘇州飯店で、共演者の許さんが、凶凶しく部屋に入ってきた。一緒にいた友人の女優恵妹が彼を追い出した。これでゆっくり眠れた」(雪1934:8)。

「許さんが撮影の時に、わざと〈本気〉のキスをした。私は非常に不愉快に思った。仕事とはいえ、決まったシーンより多くキスしたことが許せない。今後チャンスを見つけて、彼に懲罰を与えよう。

夜のダンスホールで、許さんに抱かれながら踊ったときに、彼は右の太ももを私の体にぴったりつけていた。私は彼に警告したけど効果がなかった。〈芸術〉のためだから、仕方がない、と自分に言い聞かせた」(雪1934:34)。

【事例2】:女優という存在は、憧れるスターであると同時に、「戯子」(芝居役者)と見なされ、差別されることもあった。

「広東で撮影した時、3人の女学生が会いに来た。広東語で話したが、私はしばらく広東にいたから少女たちの言葉が理解できた。少女たちは映画の世界に入りたいたから、紹介してほしいということだ。3人とも美しく健康的だ。とにかく上海に行きたいから、どこの映画会社でも構わないと頼んできた。いじらしい映画ファンだ。私は何ができるかなあ、商人制度に支配された映画界では、誰がファンに時間をかけて面倒を見るの?しかし、失望させたくないから、何かいい情報があったら連絡すると返事した。少女たちは感激し、私のサインを得てから帰った」(雪映1934:123—124)。

「蘇州で撮影した時に、役のために顔に黒や赤の色を塗って、人力車に乗っていた。このシーンは私にとってもっとも大事なところであったため、気合を入れた。見物客の中に私を憧れるファンがいる一方で、少年たちからは『彼らは映画を撮る戯子だ』という言葉聞いて、ショックを受けた。『戯子』という二文字を聞くと、とても耳が痛くなった。半日ぐらい気分が悪かった。仕方がない、見識が遅れて、かわいそうな人々だ」(雪1934:8—9)。

【事例3】:ヌードシーンの撮影にまつわる雪映の心境と対応

を通して、仕事とはいえ、できるだけ自己防衛のために頭を使って対応したところから、智慧と勇気のある女性であることが分かる。

「ヌードシーンを撮影することが監督から言われ、何回か断わっていたが、最後には断り切れなくて仕方がなくOKした。私は撮影するなら、現場に関係者以外は立ち入り禁止という条件を付けた。監督も了承した。ところが、撮影本場の日に現場に行ったら、知らない男の人がたくさんいて、びっくりした。あまりにも約束と違うから、私はそのまま現場を去って、監督に撮影日を変更してもらった。

撮影変更した日の夜8時。監督にカメラマンと監督、友人の女優恵妹は現場に残っても、それ以外の人全部出てほしいと要求した。監督は照明の2人が必要と粘ったけど、私は拒否した。すると、照明の2人は光の調整をしてから仕方がなく部屋を出た。なのに、オーナーの男が入ってきた。微笑みながら私をジッと見ている。あの顔、毎月給料を払う時とまったく違うのだ。腹が立って監督に、オーナーも出てほしいと頼んだ。監督が困って、ボスだから、言いつらい、と。男たちが話している隙間をみて、私はオーナーの夫人に電話をかけた。夫人には余計なことを何も言わず、これからヌードシーンを撮影するから、よかったら見に来ないかとだけ言った。しばらくすると撮影が始まった。上半身の服を脱いたとき、監督が近くに来て、ポーズの指導をしたそうだったが、私は恵妹がそばにいれば結構だと断った。ちょうどその時、誰かが部屋のドアを大きな音でノックした。オーナーは大声で、誰であつても入れないと叫んだ。しかし、監督はその声を聞いて、オーナー夫人の声と分かって、ドアを開けた。その後の様子は想像つくだろう。オーナーは驚いて、怖くて、呼吸もできないぐらいだった。もちろん、奥さんが激怒した。一方、監督は撮影が終わってから、私にヌード写真を撮らせてくれと頼んだ。このような写真が流出したら大変なことになるから、と監督に撮られたくないと言ったが、監督は何も言わずに笑っているだけだった。仕方がないから、写真を撮らせた。恵妹は、おそらく監督がこれらの写真をたくさん印刷して家で鑑賞するだろう、と言った」(雪1934:13—18)。

【事例4】:ヌードシーンの撮影は嫌だったと言うが、女優という仕事をしている以上、やはりプロとしてのプライドも日記を読んでいて感じる。

「このヌードシーンは観客が満足しているかどうかは心配

だ。自分の身体が前より痩せていて、細くなってしまった。胸部と臀部が痩せ細ってるから、観客に悪い印象を与えたら困るなあ」(雪映1934:43)。

「『愛の花』という映画でヌードシーンを撮影した。制作側からすれば、客寄せのためもっとも重要とされたシーンであった。しかし、この重要とされたヌードシーンは、南京政府の審査を受けて削除されたことを聞いて、私は内心で喜んでいた。もともとこのシーンが好きではなかったし、ストーリーと関係ない。削除されたことは、投機商人にとって頂門の一針になるだろう」(雪映1934:146)。

【事例5】:女優の仕事は時間が不規則で、ハードなスケジュールが組み込まれていることもあって、悲鳴を上げていた。

「夜7時から翌日朝の4時まで撮影を続いていた。タバコ1箱を吸い終わって、ひどく疲れた。朝、帰宅してから寝て、午後1時に起きた。午後からまた撮影。このような苦しい生活はもうたくさんだ」(雪映1934:166)。

「午後3時―夜11時の撮影のため、とても疲れた。アメリカの映画雑誌にあるハリウッドスターを羨ましく思う。美しい服があるだけでなく、華やかで整えられた撮影環境を見て、中国女優の不幸が証明される。だが、このようなことは公では言えない。本音は私的な日記に書くしかできない。もし、公然とみんなの前で話したら、きっと見栄っ張りや、物質欲が強すぎるといった罵声を浴びるだろう。しかし、神さま! 私は女子だから、女の人が美しい衣装で身体を隠すのは、エバから始まっていた。私は社会主義の信者ではないから、自分の美しいものを求める気持ちをわざわざ隠すことができないのだ。

ハリウッドの映画女優は努力すれば、だいたい成功するが、中国映画女優の多くは俗っぽい監督の下で、才能を発揮できないから成功できるわけがない。私が主人公になった映画も、監督のせいで、むちゃくちゃになった。上演前に試写会で映画を見て、一晩中泣いた。もう二度と見たくない」(雪映1934:36―37)。

【事例6】:外国女優の報酬が高くて、監督と結婚し幸せな人生を送る雑誌記事を見て、とても羨ましく思う。一方で、中国女優の報酬はハリウッドの女優と比べられないけど少ないけど、金・プライド・社会的地位の選択肢が迫られた時、金を捨てることもできる。女優はモデルと違って、金があれば

ば何でもする人ではない、と雪映は日記で自分の心境を書いてある。

「中国の女優は貧しい。先月、気に入った服を買う金がなくて、会社に経費として落してもらいたかったが、自己負担だと強いられて、だめだった。ハリウッドの女優は監督と結婚する人もいて、夫婦二人の報酬で月2万ドルをもらって、幸せの頂点に立てる。恵妹がどんな女優も監督の夫人になりたいでしょう、と皮肉っていた」(雪映1934:19―20)。

「ある出版社のカメラマンから、ヌード写真集を作るから、裸体の写真を取ってもらえないかと聞かれ、報酬100元という。すぐ断った。われわれはモデルではないから」(雪映1934:175)。

「Kという映画会社から誘いがあって、月給は400円で、今の映画会社の300元より条件がいい。しかし、いろいろ考えた上で、その誘いを断った。確かにK社は大きい映画会社で行きたい気持ちがある。けど、そこは一流女優が多いから、自分が行ったとしても、おそらく二流女優になるだろう。収入は増えるけど、地位は下がる。今の会社との契約もまだ終わってないから、責任もあるだろうし」(雪映1934:187)。

【事例7】:女優は軟弱な存在ではない。自分で自分を守るという強い意志が日記から見受けられる。

「映画撮影現場に参観客を入れることがある。しかし、これら参観客は撮影のプロセスを見学するより、だいたい女優を観賞する。ある日、友人の恵妹が腿に関わるシーンの撮影を行った。透けて見える服を着て、強いライトの下で白くてみずみずしい両足が現れた。背広の参観客たちがたちまち集まってきて、恵妹をジーと見ていた。恵妹が動くたびに参観客も付いていく。すると、恵妹は何か理由を見つけて着替え室に行き、外にいる人たちはだいたい待たされた。ずっと出てこないから、監督が彼女を呼びに行った。『すぐ行く、すぐ行く』と恵妹の返事は良かった。最初優しい声だったが、監督に催促されると徐々に鉄のような硬い声で返事してきた。監督が怒って、私と一緒に更衣室に入った。恵妹がタバコを吸っていた。これを見て、監督がもっと怒った。なぜ出てこないかと聞いても無視された。私は、撮影の時に参観をやめたほうがいいと監督に提案したが、監督から、ほかの大スターも同じことを言っていたと言われた」(雪映1934:171)。

「広東で撮影したとき、映画スポンサーから報酬を受け取

るためにホテルに行った。その男からロビーではなく、部屋に来てくれと言われた。ホテルの部屋に入り、ドアが締められて、危うく逃げられない状態だった。男は無理やり抱きしめようとして旗袍(チャイナドレス)のボタンが壊された。この様子は映画のシーンで見たことがあるけど、まさか自分の身に降り注ぐなんて!私は男に『撮影が忙しくて、何日もお風呂に入ってなかった。先にお風呂に入りたいから、バス風呂のある部屋に変更できないか』と尋ねた。男はすぐホテルの使用人を呼んできた。部屋のドアを開けた瞬間、私は堂々と部屋を出て、エレベーターに乗り込んで難を逃れた。何が起きたか、男が分かったときは、もう遅い。この事件後、撮影が終わってないけど、私は『明日上海に帰る』と映画会社に言い捨てた。残りのシーンも拒否した。実はこのような男との間にあるピンチはもう3回目だ』(雪映1934:124)。

【事例8】雪映の身の上話。アルバムを整理した時の感想を日記にした。

「17歳だった女子中学校の時がもっとも輝く少女時代だった。その時の容姿が好きで、誰が見ても羨まがれた。あのまったく価値のない元通(前の夫の名前)と結婚したのが失敗だった。今、離婚したけど、心も古い井戸のように何も動かない。映画芸術以外、ほかのことはもう興味ない。今の写真を見ると、自分はもう青春から離れているように思う。心が泣きたくなる。あと何年女優でいられるのかは分からない。考えるだけで怖くなる。今、新人女優も多く、彼女たちは若くて将来性は無限だ』(雪映1934:31)。

主題2：身体表現とファッション

雪映日記の中に、旗袍(チャイナドレス)に関する記録はそうは多くない。それでも、ファッションに関する記述の中では、「新装」のような曖昧な表現もあるにしても、必ず明確に旗袍の色と素材、着用する状況などを書いてある。当時の女優にとって、旗袍は当たり前モダンファッションであって、欠かせないものであることが分かる。

高級な場所ではスーツという洋装を着たこともあったが、「新装」としか書いてない服については、旗袍なのか洋装なのかわからなかった。しかし、その後の描写、たとえば、モダンな銀色の足指が見える皮靴、露出した腿……のような文書を見ると、おそらく旗袍にあるスリットの様子が描かれ

ているように思う。

女優になるために、旗袍というモダンファッションは欠かせないものだった。女優志望の親戚少女に旗袍を仕立て、モダン少女に改造し、撮影所に連れていき、監督にスタイルを細かくチェックさせた。雪映は戸惑いの少女に抵抗しないように指示した。逆に、女の身体ラインを詳しく検査しないと、女優として使えるかどうかはわからないだろうと言い切った。

女優の職業にとっての身体は、大きな問題となり、その身体をうまく表現できるのが旗袍であることも日記の記述で分かる。かつて男性知識人を真似し、1920年代流行した「新型旗袍」(ボディラインを隠すドレス)と違って、女優のセクシーさを見事に表現している「海派旗袍」(1930—40年代に流行した緩やかなボディラインを表すドレス)の役割も垣間見える。

【事例1】：ダンスホールの服、女優になりたい少女の新旗袍。

「映画スポンサーに誘われて、恵妹と一緒に百楽門ダンスホールに行った。百楽門は『ダンスホールの頂点』や『極東一の極楽場』とされるモダン上海の象徴であった。行く前に、美容室でパーマントをかけたが、どんな服を着て行くか分からないから、本当は行きたくなかった。百楽門は特別な場所だから衣服に気を使う。ちょうど、先週仕立屋に頼んでいた新装が仕上がってきたから、持ってきてもらった。淡い黄色い新装。この新装を見て、初めて行く気になった。恵妹は白い西装(スーツ)を着ていた』(雪映1934:48—49)。

「オーナー夫人の服センスが悪くて、金の飾りや宝石のアクセサリーは時代遅れの古いファッションだ。かわいそうに、金がかかっているけど、ちっとも美しくない、モダン時代の落伍者なのだ』(雪映1934:54—55)。

「親戚の17,8歳の少女が映画好きで、女優になりたくて上海に来た。身に着いていた白い短い上衣と黒いスカートはちょっと前までの先端ファッションだったが、30年代になるともう古くなった。女優になりたいなら、まず旗袍を着せないといけない。少女に新しい旗袍を作ってあげてから映画会社に連れていった。

少女が持ってきた服は古い服ばかりだったから、今朝仕立の職人に頼んで、モダンな服を作ってほしい、と家に来てもらった。私は7元ぐらいの淡い緑の凸花縞の生地を少女にプレゼントした。しかし、仕立ての値段は、レースや縁取り

を合わせて11元あまりしたのだ。この『時髦』(モダン、最先端)は、内陸の人は夢にも思わなかつただろう。翌日の昼、職人が出来上がった新衣を持ってきた。とてもびったりして、胸とウエストからボディラインが見え、とくに、胸の輪郭が来た時の古い白上衣より明確になった。EXOTIC(エキゾチック)なセクシーさが漂っている。少女自身も鏡を見て驚いて、喜んでいて。私は成衣匠(仕立の職人)の技術を褒め称えた。旗袍を着た少女に化粧を施した。唇に紅を付けて、頬に胭脂、目に藍色のアイメイク、指に赤いマニキュア、完全にモダン少女に改造した。

改造後のモダン少女を連れて、監督を会いに行った。すると、監督が少女を四方八方から観察し、身長やウエスト、足の長さなどを目で計った。最後に、バストも計って、少女に自ら旗袍の裾を開いてもらって、太ももを見せてと要求した。少女が戸惑って怖くなった。しかし、私は目で少女に抵抗しないように指示した。バカだね、女の身体ラインを詳しく検査しないと、女優として使えるかどうかはわからないだろう」(雪映1934:58—59)。

【事例2】:上海モダンガールの洗練さ、広東女優の野暮ったさ。旗袍の美しさに男たちが虜になった。

「広東行きの船上ファーストクラスにて、某銀行長を務めていた男がパーティーを開いた。上海の女優たちを誘った。パーティーの時に、広東女優は濃い化粧をし、艶やかなファッションをしていた。それに対し、私や親戚少女の素莉は、薄い黄色シルクの旗袍や無地の旗袍を着ていた。濃い化粧の広東女優たちは娼婦のようで、男たちの好みでなかった。上海女優の薄化粧とシンプルな旗袍は、逆に美しく、多くの男性が上海女優のモダンな素足に惹かれて虜になったのだ」(雪映1934:85)。

【事例3】:「奇装異服」の禁止と旧道徳の提唱。

「広州での撮影期間に、上海と違って、身体や服装に対し、旧い道徳が盛んに提唱されていた。プールで男女一緒に競泳は禁止されている。また、モダンなファッションも禁止されていた。上海から持ってきた足指が出るハイヒールのサンダルなどあまり見られない。旗袍のスリットから露出した腿を町で歩くと、いつも注目される。今朝も新聞記事を見たけど、昨夜、警察が何人かのモダン女子を逮捕した。素足だったから、奇装異服で風俗を犯したからという理由だった。まだ解放されていないから、裸足で出かけることに気を付

けないと、警察に捕まえられる可能性があるの、女優たちの間も緊張な空気が漂っている。その日、昼食が終わってから、ストッキングと古いハイヒールを購入した。しかし、デザインが悪いだけでなく、値段も高かった。これは、革命発祥地で受けた懐古的影響だ」(雪映1934:113—114)。

【事例4】:お祝いパーティーでの旗袍の魅力。

「ある日、お祝いパーティーに参加した。上流階級の官僚と夫人や、商人、紳士が多い。私は紫色のインドシルクで作った旗袍を着ていた。旗袍の袖が短くて、肩にショールをかけていた。短い靴下だけを穿いていて、腿は露出している。広州は風紀に厳しいから、ストッキングを穿くことが敬遠されている。何とか先日ストッキングを買ったけど、結局、色が旗袍と合わなかった。それなら、自然な素脚のほうが美しいだろうと思い、冒険しようと思った。本当に警察が生足の自分を捕まえるかどうかを試してみよう。ところで、会場にいる紳士たちは、みんな目を大きくして、私の生足をじっと見ている。これは、旧い道徳を提唱する革命聖地の欲望を露わにした変態だろうか。また、夫人たちも同じように私を見ていた。彼女たちのまなざしに、驚きと恨、嫉妬と羨む気持ちが全部入っている。私の膝の下が生足だけではなく、膝上の太もも『公開』しているからなのだ。旗袍のスリットから露わにしていて、肌からしみ出た誘惑のセクシーな潤いと光沢があった。このパリ産の腿のファンデーション(擦腿粉)は、広州ではおそらく私しか使っていないだろう。ほかにこのファンデーションを持っている女はいないだろう。こうして、しばらく金持ちたちと応酬し、10枚ぐらい豪富の名刺をもらった。全会場から、注目のまなざしが私に注いでいる」(雪映1934:120—121)。

【事例5】:女優の旗袍。

「杭州へ撮影に出かけたとき、淡い緑色の縞旗袍を着ていた。旗袍の上に縮緬のコートを羽織っていた。助演女優の恵妹は茶色の旗袍を着ていた。映画ファンだった杭州の女学生は、西湖の撮影現場を見に来た時、藍染の上衣下裳の制服を着ていた(雪映1934:176—177)。

「ダンスホールで、ほかの映画会社の女優3姉妹もいた。三人とも淡い黄色い旗袍を着ている」(雪映1934:229)。

「広東の映画撮影に出かけた船で、長いパーマントの髪形をして、旗袍を着ていた。海風が吹いてきて髪が乱れ、風で旗袍が体を巻き付けている。風が旗袍の袖口から

下着まで届いて、風に包まれて全身が優しく撫でられているようだ。この美しい海の景色は、しばらく見てないが、大自然はなんと美しいことか」(雪映1934:82)

【事例6】:モダンガールの外と内。西洋教育を受けた香港青年と出会った時、国語ができず、ストレートな質問に戸惑った雪映は、西洋的な価値観を取り入れたモダンガールであるが、中国女性のプライドや自負心(矜持)を持っていることも分かる。また、同じモダンガールである妓女のモダンな外見と古い身体とのギャップを皮肉った。

「広東で撮影した際、香港大学を出てイギリスのオックスフォード大学に留学が決まった親戚の男性と会った。しかし、互いにあまり交流ができなかった。私は広東語ができず、彼は国語(中国語)ができず、二人は英語で少し話した。香港の青年からストレートに質問された時に戸惑った。恋愛経験がどのくらいあるのか、スクリーンではLove Sceneをよくやるのか、などなど。困った」(雪映1934:95)。

「広東から上海へ戻る船の中で妓女の女性とシャワー室で出くわした。彼女の腹部に残った深い痕は、旧式女性がきつく身体を束縛した『成績』だろう。こんな花のようなモダンガールなのに、中身はこんなに古いのか。だから、顔に濃い化粧をし、旧さを隠すのに力を注いでいるのだろう」(雪映1934:140—141)。

主題3：メディアへの対応

女優とメディアの関係は、持ちつ持たれつだった。映画宣伝のため、また「女優」という存在に好奇心を持つ大衆に応えるため、女優の恋話やうわさ話など、事実であるかどうかとは関係なく報道される。

男性中心の映画界では、「女性」の身分を利用し、美しい身体曲線を見せて新たなチャンスを掴もうとした女優たちは、新聞やメディアでの報道は、時に自分の仕事にとってプラスになることがある。

雪映は主演女優として、記者から取材を受けたことがたまにあった。その時、きれいに書かれた記事には、満足のようだが、自分の名誉に傷つけるような新聞記事に対しては、抗議したり、記者と直接対決することもあった。メディア記者の報道について、自分のイメージ作り効果を見極めて、妥協することもあれば、堂々と反撃することもあった。日記の中

での男たちとの対応には、親密性を保ちながらも緊張感と衝突が見られる。

そのうえ、雪映は他の女優と違って、一方的にメディアに書かれるだけの女優ではないのだ。自らも新聞に寄稿していた。雪映は「書かれた」女優と「書く」女優の両面をもつ女性である。

【事例1】女優は常に大衆から注目され、娯楽の対象である。女優の噂をネタにする記事は、小さな町新聞によく報道される。

「噂やスクープをメインに報じる大衆紙(タブロイド)に、私が監督やほかの男性と蘇州のダンスホールで一緒に踊ったことが報じられた。それだけでなく、監督と秘密に婚約したとまで書かれた。私は怒りを込めて、会社に直ちに訂正するようにお願いした。だが、会社の広報担当者は、大衆紙が女優の噂をすることは分かりきったことであり、事実を表明するには長期的に広告を載せないと噂は消えないから、オーナーと相談すると答えた。夜、張君と莫君とドライブで上海郊外に行った。その後、上海のメインストーリーでロシア料理を食べ、ダンスホールで踊った」(雪1934:12—13)。

【事例2】新聞記事にある雪映の美しい容姿に対する描写や、色っぽい旗袍とセクシーな身体に関する記述には、彼女は満足のようだ。自分の化粧術は、多くの男たちの心を掴んだだろうと自慢気に書いてある。

「新聞記事に私のことを描かれている—きれいなパーマメントが肩にかかって、上品で艶やかな化粧は人々を照らしている(艶光照人)。薄紫色の旗袍に現われた素足は桃色で、見ていて、とても好きになって、離れたたくなるだろう—私の化粧術は男たちの趣味を見事に掴んだだろう」(雪映1934:22)。

【事例3】メディアに褒められることもあれば、批判に晒されることもある。雪映は主演した映画について書かれた評価を調べ、反省点と侮辱される点を見極め点検していた。

「新聞記者が上演された映画のことをあれこれ書いたが、私はいくつかの新聞記事を比較した。理にかなったものは反省するが、ただ侮辱するように書かれた内容には怒りを感じた。これは私の責任ではなく、大半は監督のせいだ。いい監督に出会わないと、女優は犠牲になる。これは中国

女優の悲劇なのだ」(雪映1934:155)。

【事例4】ダンスホールで、侮辱記事を書いた記者との直接対決。

「最近、あなたが新聞で発表した文字を拝見しとても敬服している。しかし、私が主演を務めた映画について、上映の成績や演技に問題があるなら、厳しい批評を書いても構わないけれど、なぜ、私をたびたび罵倒するのかと迫った。記者が必死に否認し、周りの人にも緊張が走った」(雪映1934:158)。

主題4：女優の恋愛と男性関係

『女優日記』で雪映は、女優の仕事をこなす一方、プライベートでの恋愛や男性関係、結婚と仕事の選択など、多彩な側面を見せてくれている。雪映は一回離婚を経験し、メディアに隠して、恋愛と結婚に積極的ではなかった。

【事例1】張君と莫君は、常に雪映のそばにいる二人の男である。張君は未婚で、雪映のフォロワーであって、ビジネスマンである。一方、莫君は南京政府の官僚で既婚者だが、上海に来てよく雪映とデートする。男たちと一緒に、レストランで食事をする、映画を観ること、ダンスホールで踊ることは、日常生活の一部になっている。彼女のことを気にいった男たちが費用を払い、男同士の間で雪映をめぐる駆け引きがあったことも見て取れる。

「清潔感のある幕君は、南京政府の課長であり、30歳ぐらいの既婚者。一方、張君は広東出身のビジネスマンで、熱烈な追求者として私と結婚したい男の一人だ」(雪映1934:53)。

「張君と莫君と私の3人で一緒に大光明映画館で映画を観た。私の両側に張君と莫君が座っている。観覧席の私のファンたちから二人に羨むような視線が注がれていた。映画を観る時に、幕君が私の腕を手を取った。恥ずかしいけど、そのまま許した。映画の後、西洋レストランで食事をしてから、午前3時までダンスホールで踊り続けた。ダンスホールを出てから、二人に家に送ってもらった。今回は、莫君は40元ぐらい払ったが、張君は何も払わなかった。まるで私を餌にして、莫君に金を使わせたようだ」(雪1934:1—2)。

【事例2】複数の男と食事をしたり、ダンスホールで踊ったりしている雪映にとって、監督の存在は大きかった。女優としての仕事や将来に男性関係が影響したりしないようにと思っていたことが日記を通して分かる。

「撮影のため、上海を離れ蘇州に行った。私は浅い黄色い旗袍の上に短めの青いジャケットを羽織っていて、周りの人々から注目されていた。張君は果物の籠を持ってきて、私を見送りに来た。本当は来てほしくなかった。共演者の許さんに見られても嫉妬されても、別に恐れることはないのだが、問題は監督だ。監督に見られて、私が本当に張君と何かあるかのように疑われると困る」(雪映1934:7)。

【事例3】広東で撮影した時に、軍人パイロットの葦君と知り合って恋に落ちた。しかし、上海にいる張君からも熱烈な愛を受けている。雪映は男たちの恋愛感情を弄ぶ。もっと愛がほしい、もっとやさしさがほしい、という気持ちを日記に綴っている。

「葦君と一緒に映画を観に行った時、ヒロインの女性が幸運に恵まれていることを羨ましく思った。二人の男の間を行ったり来たりしている主人公は、二人から同時にやさしさを享受している。自分も同じように、どうにかして葦君と張君を同時に『支配』できないか……と妄想していた」(雪映1934:133)。

【事例4】雪映の人生の中に何人かの男が現れたが、彼女の心を動かしたのは広東で撮影した時に知り合った葦君だった。雪映は葦君から熱烈なラブレターをもらってから、彼を好きになっていく。雪映が広東での撮影が終えて上海に戻ってからも葦君が上海に来て、婚約指輪を彼女に贈った。だが、最後にほかに女性がいたという理由で、雪映との結婚には至らなかった。それでも、雪映は葦君を責めなかった。結婚ができなかったのは葦君のせいではないのだ、運命なのだと自分に言い聞かせた。この大恋愛後の失恋は雪映を深く傷つけた。もう一生、誰とも結婚したくないと日記に書いた、これは最後の日記であった。その後、二度と筆を執る日はなかった。

「この時代の男が発した言葉は女の人と同じ、責任が持たない。映画のワンシーンの如く演技のようだ。葦君が私のために上海に来てから、私は毎日のように彼が泊まっていたホテルに会いに行った。一緒に食事をして、ダンスホールで踊り、時には競馬場で楽しんでた。葦君が馬券で勝った賞

金で、プラチナの婚約指輪を買った。しかし、翌日負けたから、少しでも換金できるように、私は婚約指輪を返そうと思った。

その後、上海を離れた葦君から思わぬ長文の手紙が届いた。内容は次のようだ。以前、ヨーロッパ留学した際に知り合った女性が彼のことを忘れられなくて、わざわざ中国に来たのだ。彼は彼女の行動に感動し、私に申しわけないけど、そのアメリカ女性と結婚しないとイケないと思うようになったのだ。その海倫女士(Helen Moran)というアメリカ人女性に対して、彼が自分の本心を否定し、彼女を愛していないとは言えないのだ。二人の女性をともに愛したとしても、時空間において愛の順番があるのだから……。私はその手紙を読んで、身も心もずたずたになって大病した。もし、レントゲンを撮れるなら、私の心臓が破裂していることがきくと分かるだろう。大病後、もうこの一生、誰とも結婚したくないのだ。葦君に手紙を書いて、婚約指輪と一緒に送った。葦君の手紙をすべて日記に写して、これを最後の日記にした。そうしないと、自分の心の傷を癒やせないのだ、悲しい記憶を消すことができないのだ」(雪映1934:154)。

主題5：金銭感覚

雪映の日記から、彼女の収入、使い方、そして男性関係の中で金銭をめぐるどのように振る舞ったのかを読み取ることができる。

女優の月給300元以外に、広告収入やレコードの報酬もたまにある。しかし、雪映は貯金しないで、即百貨店で使った。女優は一般の女性より給料が高いけど、雪映はいつもお金が足りないと日記に記載している。モダンガールの「消費能力」が見て取れる。メディアではよく「モダンガールが経済的自立してない」といった批判を目に付くが、果たしてそうでしょうか。確かに、彼女たちの後ろには男の影があるかもしれないが、雪映のような職業女性は、基本的に自分の稼ぎで消費していることも分かる。

【事例1】月給300元のうち、25元の旗袍生地は給料の8%を占めていた。また、化粧品やチョコレートといったものも、当時のモダンガールの愛用品であったことが分かる。お金が足りないことが多く、給料の前払いに関する記述が多く見られる。また、友人女優の給料や、映画監督の収入も記載し

てあるが、雪映の報酬のほう为上だったことが分かる。

「毎月の家賃は75元だった。先月の給料を早く使いきったので、使用人の女性を会社に行かせ、今月の給料300元を前払いできないかと尋ねたけど、100元しかもらえなかった。私はこの100元を持って百貨店(永安公司)に行き、青い旗袍の生地を25元、化粧品を8元、チョコレートを5元など購入した」(雪映1934:4)。

「お金がなくなって、会社に前払いしてもらうように電話をかけた。会計担当から金がないと断られた。仕方がなくオーナーに電話した。オーナーから『立派』な答えをもらった:月末になったら払うよ、と。おそらく、先日のヌードシーンの際、思う存分私の身体が見られなかったから、給料のことでふざけて報復しようと思っただろう」(雪映1934:22)。

「友人の恵妹は助演女優として毎月70元の給料で、まったく足りないのだ。中国の映画監督の待遇は毎月100～200元ぐらいなので、才能のある人は来ないだろう」(雪映1934:46)。

【事例2】月給以外に、広告やレコード録音の収入をもらうこともある。しかし、雪映は貯金しないで、百貨店で消費していた。

「家具会社からある契約が持ち込まれた。商品宣伝の広告収入や商品券300元を報酬とし、また市場では200元ぐらい売られている有名ブランドの赤いベルベットのソファがプレゼントされるという条件だった。私は喜んで契約を交わした。撮影当日、藍色の旗袍を身に纏って現場に臨んだ。3枚の写真を撮り、商品の宣伝文句が『○○モダン木器、家具の中のスター』となっている」(雪映1934:33、38)。

「レコード録音の450元収入があったが、貯金しないで、すぐ百貨店に行った。百貨店に厚い札金を『孝行』した」(雪映1934:170)。

「友人の恵妹に言われ、食事後上海銀行に行き、650元を貯金した。恵妹も困っているようで、40元を貸してあげた。その後、二人で南京路の百貨店で日用品をたくさん購入した」(雪映1934:34)。

「給料日はカバンがお金でいっぱいになった。しかし銀行に行きたくないのだ。まず百貨店に行った。一瞬で50元を使って、後悔するけどやめられない」(雪映1934:226)。

「毎月300元の給料は一般の職業女性と比べると少なくないが、それでも足りなくなる。そろそろ貯金しないといけな

と思った。友人恵妹に知り合いが勤める上海銀行を紹介してもらって、先日もらった200元(300元だったが、100元は前払いした)の給料の中から、150元を銀行に入れるつもりだった。だが、銀行員が私の名前を知り、驚いた眼で私を見ていた。女優だからみんな知っている。しかし、女優なのに150元しかもってこなかった。これぐらいしか貯金できないことは恥ずかしくて、顔に泥が塗られたかのように思った」(雪映1934:31—32)。

【事例3】いつも金が足りない雪映だが、金がない中でも、どうしても欲しいものがある、自分の欲望を抑えきれない時、やはり男たちを利用して。誰か男を捕まえて、ほしいものを買ってもらった。モダンガールの魔力を發揮したことが垣間見えるだろう。

買ってもらいたい相手は慕君だった。寝室まで招いて、「一人が寂しいから、誰か男でも……挑発的なニュアンス」のような「失言」をした、と雪映は日記で書いたけど、男の気を引くような行動は見えない。その目的は、百貨店にある可愛すぎる白い手提げバッグを手に入れるためだった。

「ポケットに金はないけど、百貨店でウィンドウ・ショッピングを楽しみたい。先日見た白い手提げバッグが気に入った。精緻で可愛くて、ほしいのだけど、39.5元だった。なぜこんなに高いの? 私は何とか方法を考えないと買えないだろう」(雪映1934:23)。

「今朝、莫君が家に来た。待たせるのが悪いから寝室まで招いた。その時、私はストッキングを穿こうとしていた。慕君は寝室をじろじろ見ながら、きれいな部屋ですね、幸せな美人しか似合わないですね、と言ってくれた。私はジーと彼を見て、『冗談を言わないで、一人で住むのは寂しいですよ』と、言ってから、失言したと感じた。だが、慕君は笑った。

その後、私たちが家を出て、莫君が銀行で800元を降ろしてお昼をごちそうになった。食事後私は慕君に、一緒に百貨店に行って香水を買いたいと言いつ出した。莫君は、ちょうど君にプレゼントをしたいから、いいタイミングだ、と快く承知した。香水にしようと言った。百貨店で、2瓶の香水を購入し、12.5元だった。しかし、私の頭の隅では、先日に見た可愛いバッグがまだ忘れられない。莫君と一緒にそのバッグのカウンターに行き、見せてもらった。自分に金がないことは分かり切っていたけど、バッグがほしい。私がこのバッグが好きそうな様子を莫君が横で見て、これも君に買っ

てあげる、と言った。私は何も言わずに、笑顔だけを作った。莫君はバッグの値段を見てなかったから、値段を見たときには驚いた。だけど、もう手遅れだ。莫君の手がすでに金を握っていた。39.5元を払った。私はちょっと罪悪感があったが、自分の欲望に勝てないから仕方がない、と自分に聞かせて念願のバッグを手にした。その後、2人がレストランで一緒に食事をした。

このことを友人の恵妹に話したら、高い金を払わせて、男はただで済むと思うのかと驚いた。ある日の夜、莫君に誘われてダンスホールに行った。そこでシャンパンを少し多めに飲んだ。その後食事に行き、夜12時に回った時私は酔いから醒めた。何とか自力で人力車を呼んで帰宅した。莫君には下心があった。これから彼とは遊ばない。家で30分ぐらい泣いた。しかし、泣いてからすっきりして、かえって深い睡眠に入った。

このことを受けて、やはり男はただでモノをあげたり、金を使ったりはしないのだ、と実感した。買ってもらったものを莫君に返そうと思ったが、やはりやめた。返すのはバカじゃないか。だけど、莫君が私に『親愛なる妹よ、私は妻と離婚して、あなたを妻にする』と言ってきた。私はまったく動じなかった。何だ、このバカな話! 誰があなたと恋愛しているの???(雪映1934:26—28)。

【事例4】女優の収入は多いか少ないか。

「一般の人なら毎月10元で生活できると母は言う。300元の給料を聞いて、実家から上海に来た母が驚いた。200元は貯金できるだろう、と。私は、それでも足りないのだと言った。母はもっと驚いた。父は年間300~500元の収入で家族全員を養っただけでなく、子どもたちを学校に送った。今の時代、女の人も演技でこんな大金を稼ぐことができるなんて……。金は簡単にできないから、貯金が大事だと母は言った。私は母に、ほかの女優がアヘンに手を出して、もっと悲惨だったことを話して、自分はいいほうだと弁明した。300元は普通の人と比べると多いかもしれないが、アメリカの俳優たちは、毎週の報酬は7千元か8千元だと言ったが、母は信じてくれなかった」(雪映1934:212)。

「ある百貨店で、たまたま私の小学校の同級生と会った。女店員をしている同級生は毎月の報酬は25元だった。生活費が足りないから、私に映画の仕事がないかと頼んできた」(雪映1934:227)

【事例5】撮影のために、雪映が広州に行った時の食事や娯楽の費用は、ほとんど周りの男たちが払っていた。しかし、雪映は、これら男たちの金使いぶりを見て、その妻たちのことを想像し、妻たちの代わりに不満を日記に書いた。「主婦」のような感覚を持っていることも垣間見える。

「広州では食べることに一番こだわった。『生在蘇州、吃在広州、死在柳州』（生まれは蘇州がいい、食は広州がいい、死ぬのは柳州がいい）という言い回しがあるように、広州にいる間、たくさん食べた。しかも、金がかからなかった。毎日レストランで食事をしているが、毎日義侠的な男子が払ってくれる。何も心配事がない。しかし、男子たちがこんなに贅沢して、外で浪費している様子を見て、彼らの妻たちは毎日食事を作って、彼らの帰りを待っているに違いないと思った。もし、私にもこのような旦那がいたら、家のため、必ず旦那のポケットの中の金を減らす」（雪映1934:110—111）。

【事例6】映画撮影の報酬交渉について、深く考えていなかったことを後悔する内容もある。

「給料日の時に、ヌードシーンを撮影する前に報酬交渉をしてこなかったことを後悔した。あらかじめ会社と約束をしないともらえないかも。この世界は男の世界であって、映画の世界はもっとそうなのだ。われわれ女優は、社会的地位もないし、飾り物として使われている。これらのことを考えると気持ちが落ち込んでいく。それだけでなく、女優になると、子どもを産む権利も奪われるのだ」（雪1934:28—29）。

主題6：同性愛と結婚観

民国期には女性同性愛のような事例が多く見受けられる。その「男役」の人は男っぽい「新型旗袍」を身につけていて、「女役」と一緒に映った写真が雑誌や新聞に記載されていた。日記にも、雪映が女学生時代の時、女学生同士が「夫婦」のような振舞い記述や、映画界の中にある女優同士の同性愛などが記載されている。

民国期の男社会に生きる女性たちから、儒教的な教えへの反発や、公の場に出てきた女性たちの男たちに対する不安などが反映されているのではないかと思う。「同性愛」とされたカップルはだいたいその後、普通の結婚生活を送っている。性的マイノリティーというより、「男女平等」や「女性

解放」といった理念の具現化現象か、一時的な不安を和らげる行為として、あるいは男への不信感の表れではないかと考える。

【事例1】女優同士の同性愛。

「広州映画会社の女優白麗華は、広東では有名人だ。だが、私はこの映画の主演女優として契約を結んで撮影に来たのだから、遠慮はいらない。白は嫉妬心が強く、監督と会社役人らは彼女を恐れている。白麗華は同じ映画会社にいる李絹と仲が良くて同性愛のようだ。李がほかのboy friendと交際するのを阻止していた」（雪映1934:90）。

「ミス白麗蘭の口に金歯が多い。この容姿で撮影に来るのか、おかしなモダンは鬼のようで怖い。白麗蘭と李絹は同性愛だったが、最近、李に男の恋人ができた。そのことは周りの人が知っている秘密で、知らないのは白だけだ。しかし、白と李と一緒に寝ていたことを李の男恋人に見られ、白と李は喧嘩分かれした」（雪映1934:100—112）。

【事例2】男装麗人としての有名女優の描写。

「黎灼灼（有名女優）の男装麗人姿がかっこいい。黎は男装が好きで、短髪で男みたい。Kay Franciss（ケイ・フランシス、アメリカの女優1905—1968）のようだ。彼女は広東人だけど、国語も英語も上手だし、才能のある女性だ」（雪映1934:96）。

【事例3】女学生時代の同級生の同性愛と雪映の結婚観

「杭州の撮影から上海に戻った汽車の中で、女学生時代の同級生である蛍と2年ぶりに偶然に会った。蛍は新婚旅行中だった。私はもうひとりの同級生である文淑の近況を蛍に聞いた。地元で教師をしていたが、男の教師と噂になり攻撃されたから、2人は今東南アジアに逃げた、と蛍は言った。実は、蛍と文淑はかつて、親しくて夫婦のようで、同性愛のカップルだった。その後、蛍が文淑に飽きってしまって、異性愛に変わった時、喧嘩別れした。蛍は私の女優の名声を羨ましく思っている。逆に、私は蛍の結婚生活を羨んでいる。『婚姻は女の人にとって、もっとも良い職業なのだ』ということは間違いない。そのことは、蛍が証明してくれた」（雪映1934:181—182）。

主題7：社会情勢や国家運命に関心を持つこと

雪映は女学生だった時、政治に関心があった。日本に侵された日を国にとって恥の日といった記念会に参加していた。しかし、大人になってから、周りの人たちは政治に関心が薄いことに溜息をついた。モダンガールを楽しむ一方で、国家運命にも関心を寄せていたことが分かる。

【事例1】国の恥とされた日に、映画会社から何の動きがないことにはがっかりした。

「5月9日は国恥記念日だ。しかし、会社の人々は何の反応もなかった。昔、女学校にいたころ、この日が来ると熱的な記念会や演説があって緊張な空気が張り詰めた。だが、映画界に入ってから、このような記念日もなくなった。溜息がつくほどがっかりする」(雪映1934:43—44)。

【事例2】革命根拠地である広州の軍人に対する期待感から、上海の「ひも生活の男子」(「小白臉」)とされる男たちを恥に思う。

「女優たちが田舎娘の役を演じているのに、着ている服が豪華すぎて合わないのだ。彼女たちは襤褸の服を着たくないから、監督に怒られた。ちょうどその時、近くにある軍人を養成する学校から訓練の声が聞こえてきた。グラウンドで士官たちが訓練している様子を見て、将来、このような好青年たちが日本軍支配下にある東北を取り戻してくれることを願った。上海の『小白臉』は、毎日女の人と遊び、女を楽しませることを『職業』としているから、広州の軍人たちと比べると恥ずかしすぎる」(雪映1934:109—110)。

【事例3】革命発祥地の広州で撮影した時、言葉が分からないから中国の領土だが外国にいるようだ。

「広州の街自体は乱雑で気取ってないし、秩序もないが、軍人たちの威風が維持されている。おそらく革命発祥の地なのかなあ。広州は厳しいようだが、街中モダンな人をおっちょこちで見られる。だけど、広東語が分からないので、中国の領地だけど、外国にいる華僑のような感じだ」(雪映1934:106)。

ここまで、上海女優である雪映が、自分自身の4か月半の生活軌跡を日記に記載していることを整理し、1930年代の

映画女優におけるスクリーンの中と外の生活を提示してきた。これまで示してきたことから、モダンガールの一員である女優のライフスタイルの一部分を明らかにした。

雪映は、直接に旗袍に関する記述はそうは多くないが、映画の役作りや日常生活の服、また男たちとのデートや大事なパーティーでの装い、親戚の田舎少女をモダンガールへ変身した服とした記述から、1930年代の旗袍は、モダンガールにとって当たり前の服であったことは読み取れる。

雪映の日記から見られる彼女の女優としての、そしてスクリーンを外れた日常生活でも、旗袍がさまざまに登場し、それぞれの役割を果たしている。

本論文をまとめていくに当たり、女優たちが着ている旗袍のどこが美しいのか、どこが男たちを魅了していたのか、女優たちが旗袍のどの部分に惹かれているのかを考察していく。

4. 上海女優の「隠」と「露」、旗袍に隠された「情趣」

上海の消費世界はアメリカ流の資本主義文化を背景にしているが、完全な真似ではない。映画はその一例である。

映画館はこれまでにない新しい公共空間である。この公共空間を作るために、ハリウッド映画産業はいろいろ工夫をし、女性観客の消費嗜好に的を絞ってきた。映画のストーリーより、女性が憧れる女優の写真を雑誌に掲載し、うわさ話やモダンなファッションなどを取り上げていた。そのために、服飾とモダンの内容が「現代女性」という新しい世界のほとんどを占めた。中国女優はこの新しい世界の化身である(李2001:110)。

1927年、中国映画の社会的環境に関する調査報告がある。全国で106軒映画館があり、68,000席がある。18の貿易港の大都市に分布されている。さらに、106軒中26軒は上海にある。1930年の映画チケットの値段は2角から3元(0.07ドル～1ドル)だったという(李2001:98)。

1920年代後半から一部の演劇場を改造し映画館にした。当時の上海では、有名な映画館がたくさんあった。たとえば、Carlton(カ而登)、Empire(恩派亜)、Embassy(夏令配克、オリンピックの前身)、Palace(中央)、Victoria、(维多利亚)、Paris(巴黎)、Isis(上海)、Majestic(美琪)など

(李2001:99)。これらの映画館は、ハリウッド映画の初演上映権をもっている。その後、大光明映画館がオープンし、2000席を設け、空調も設置した。ハリウッド映画と国産映画が同時に上映され、映画館は都市文化に新たな生活習慣を生み出した。

ハリウッドで最初の有声映画が上映された翌年の1927年に、上海でも有声映画を上映するようになった。1931年中国も最初の有声映画を製作した(上海研究中心編1991:360)。30年代末になると、上海には36軒映画館があった。



(写真1) 民国期上海の女優一胡蝶
出典:沈寂『老上海電影明星』上海画報出版社、2000、25ページ

こうして、中国の映画界には、ハリウッド映画の影響は大きかったことが分かる。しかし、中国映画雑誌に掲載された写真にある「流行女性の気質」には、ハリウッドスターのような大胆なセクシーさはなかった。たとえば、民国期雑誌にある写真を見ると、アメリカ女優を紹介する写真には、肉体美や、濃い化粧の顔、身体の露出度が大きいものが多い。これに対し、中国の著名女優である胡蝶(こちょう)(写真1)や阮玲玉(ロアン・リンユイ)(写真2)などの写真は、露出しているのは両腕だけであった。身体の他の部分は旗袍に包まれている。この根本的な違いは、女性美学の違いの表れでもあると思う。



(写真2) 民国期上海の著名女優一阮玲玉
出典:林釗『上海時尚一百六十年海派生活』上海文化出版社、2005、8ページ

こうした雑誌表紙にある女優写真は、一方では父系社会の男性に観賞される対象であったと同時に、中国女性の新たなイメージ形成にも効果的であったと言える。新女性たちは、大衆の前で自分を見せることを恥しく思わなくなったのだ。日記の著者である雪映もその女性の一人である。旗袍に関する描写には、自分がどのように身体を見せれば男たちの心を掴むことができるのかという作為や、旗袍の美しいところを生かして田舎少女をセクシーなモダン少女に改造したとかの記述も見て取れる。

それでは、旗袍のどこが「美」なのか。民国期の旗袍は、西洋のヒューマニズム(人本主義)思想の影響を受け、西洋の立体的裁断法の導入などによって、旗袍の形も徐々にボディラインを強調するようになった。具体的には臀部、胸部、腰部のラインを誇張し、女性のS型の曲線造型を表現するようになった。いまだに旗袍が着続けられている理由の一つはこの旗袍の構造にあるのだ。つまり、旗袍は人体のあらゆる側面、すなわち左右前後、上半身、下半身、腕や足まで、多視角的で全方位的に人体の凹凸を見ることができる。これが最大の魅力だと言われている(彭2010:46)。雪

映が親戚の少女素莉に新しい旗袍を着せて、撮影所に連れていったとき、監督が「四方八方」から素莉を観察した描写を思い出してほしい。

ハリウッドの女優と違って、中国の女優は、露骨に身体を露出するのではなく、旗袍という服自体の構造から滲み出た魅力を利用していった。旗袍審美の原則は、女性の身体ラインをきれいに表現できるかどうかということである。ここでいう「きれい」というのは、単に肉体美だけではなく、中国古典的な「隠す」と「露出」のバランスがよく、見ていて居心地がいいという感覚に陥るとのことである。とくに、旗袍の両側にあるスリットは、男女を問わず人の目を惹くのだ。

満洲人女性の旗袍に由来する民国期の旗袍にあるスリットは、20世紀20年代から始まった。スリットの効果は二つある。一つは歩きやすくするために。もう一つは歩いているときに現れる足が、見えないようでもあり見えそうでもあるという、朦朧とした美が生まれるのだ。旗袍のスリットの深さは、1930年代に、裾丈がもっとも長く、スリットは太ももが見えるぐらい深かった。いわゆる「掃除旗袍」と言われる旗袍のことだ。その後、スリットの深さは旗袍の裾丈のバランスと合わせて、高くなったり低くなったりして、流行の波を繰り返した。

そのスリットの何が「美」とされるのか。中国古典美学の中に、「隠」と「秀」、また「遮盖」(隠す)と「袒露」(露出)という美学的な思想がある。両者は、いずれも、人工的なものではなく、自然なものを良いとする。「隠」とは、含蓄があって表層からは見えない深い意味が隠されているということであり、女性の手足を含む人体美のことを表している。一方「秀」とは、女性の豊満でみずみずしい身体美、白くて雪のような皮膚、玉のような肌色のことをいう(陳1998:420)。

旗袍の中の「袒露」(露出)は、西洋のような暴露とは違うものである。楽しいけれど優雅さを保ったまま、また性的な魅力を楽しむが嫌らしくならない(樂而不雅、樂而不淫)、といったバランスの取れた「美」のことをいうのだ(彭2010:48)。つまり、「中庸」的な考え方である。性的な魅力を見せながら保守的な物も匂わせる。また、保守的なデザインを持ちながらセクシーな細部を見せる。この「隠」と「秀」のバランスに隠された旗袍の「情趣」は、西洋服にない魅力であり、民国旗袍にあるもっとも斬新な創造である。

『魔都上海』の作者である劉建輝の表現を借りると、「襟を高くし、かつ絶対胸元を露わにしないのは、中国女性の伝統的な尊厳を表すもので、逆にスリットを高くして、太ももまで露出するのは西洋的『時髦』(Smart)を追求し、女性の

『解放』をアピールするものだといわれている。つまり、旗袍のこの上下半身の不均衡な『演出』は、そのまま『華洋』二つの上海の表れであり、またこの土地の一流の『融合』であったといえよう(劉2000:215)ということになる。

最後に、雪映が撮影のためにしばらく上海を離れていて、再び上海の地に戻った時の心境を記して、本論を終えることにする。

「広東から上海の懐に帰ってきて、とても安心した。一部の人は上海をきれいと自我孤高を標榜しているけど、私は上海を愛している。上海の物質文明の生活、上海の安らぎのある家、上海にある高貴な劇場、ダンスホール、レストラン、街の車……、この国際都市を構成するすべてのものを愛している」(雪映1934:143)。

なお、本論は科学研究費基盤研究(C)の助成を受けて調査したものである(17K03292)。

参考文献

陳望衡

1998『中国古典美学史』教育出版社

李欧梵(著)

2001『上海摩登——一種新都市文化在中国1930—1945』

毛尖(訳)、北京大学出版社

林劍

2005『上海時尚——百六十年海派生活』上海文化出版社

劉建輝

2000『魔都上海——日本知識人の「近代」体験』講談社

彭勃

2010『從“月份牌”廣告看民国女性服飾審美意象的構建』湖南

工業大学修士論文

上海研究中心編

1991『上海七百年』上海人民出版社

沈寂

2000『老上海電影明星』上海畫報出版社

雪映

1934『女明星日記』上海良友圖書印刷公司印行